

## ストレス軽減を目指して —チームマネジメントを意識した関わり— Aiming at stress reduction

— - Relationship focus on the team management - -

○有働克也 (OT)<sup>1)</sup>, 丹野拓史 (OT)<sup>1)</sup>, 大堀具視 (OT)<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>IMS(イムス)グループ イムス札幌内科リハビリテーション病院リハビリテーション科, <sup>2)</sup>日本医療大学リハビリテーション学科

Key words: 意思決定, ストレス, マネジメント

【はじめに】入院生活における心理的ストレスに影響を与える要因として患者(以下CL)の性別や年齢, 日常生活活動, 入院期間などがあるといわれている。今回, 排泄においてストレスを感じている事例を担当した。CLは, 時間や人への対応に律儀な方であり, セラピストや病棟スタッフの対応にも厳しい方であった。そこで, 医療者とCLが話し合い協働しながら意思決定をする方法で, 医療者は提供する情報を制限せず, CLの意思決定に必要な情報を提供するよういわれているShared decision model(以下SDM)を用いてCL・各職種に対しマネジメントを意識した関わりを実施した。結果, 事例のストレス軽減に至った。尚, 今回の報告については本人・家族に説明し同意を得た。

【事例紹介】80代男性。脳梗塞右片麻痺。元警察官で性格は生真面目。

【経緯】転倒リスクが高く歩行に介助が必要であった。トイレへの訴えが頻回で尿意時にトイレ介助してもらえないことがストレスとなり, 病棟スタッフに対し易怒的となる事が多かった。

また, トイレ介助を行ってもらえない事で, 病棟スタッフへの不信感が高まっていた。不信感がある中で生活を送る事がCLのストレスとなり, 病棟スタッフに対しネガティブな対応となっていた。一方, 病棟スタッフはCLに対し, なぜトイレ介助が出来ないかを説明した。しかし, CLが易怒的になる事で病棟スタッフのストレスとなりCLと感情的な衝突を招いていた。そこで, 作業療法士(以下OTR)はCL・病棟双方と協力的に意思決定を行っていく事に焦点を当て, SDMを用いた介入を行なった。

【介入経過】CLへの介入: 病棟に対する対応に影響があった時期のストレス度は10点法で10/10であった。何に対してストレスを感じているのか, 病棟・リハビリスタッフに期待している事を聴取した。トイレに行きたいという希望に対し, 現状の身体機能ではなぜ難しいのかを説明した。また, 「一人でトイレがしたい」という希望があったため, ポータブルトイレ(以下P-トイレ)がある事を提案し, 使用時のメリット・デメリットを説明した。

各職種への介入: チームカンファレンスにて, 病棟スタッフがCLに感じている不満・リハビリスタッフに期待する事を聴取した。その上でOTRがCLから聴取した情報として, なぜストレスを抱えているのか, CLが病棟スタッフに期待していることを, 性格や生育歴を踏まえ説明した。また, CLと病棟スタッフが抱えているストレスが違う事を説明し, 各職種間の情報を共有した上で, CLが抱えるトイレに対する問題に対して各職種の役割を明確化し, 課題解決に向けた各職種の具体的な取り組みを依頼した。OTRはCL・各職種間のマネジメントを主として介入した。

【結果】介入当初, P-トイレの使用に意欲的ではなかったが, 1人で自由に出来るようになったことでストレスが10点法で1/10と軽減し, 自室での過ごし方も臥床傾向から椅子に座りテレビを観るなど活動的になった。また, ストレスが軽減したことで病棟スタッフに対し易怒的になる場面もみられなくなった。CLが易怒的にならないことで, 病棟スタッフのストレス軽減にも繋がった。

【考察】齊藤(2014)は, 「CLの意見にしっかりと耳を傾けながらも, セラピストも専門家の立場から意見を伝え, 協力的かつ相互交流的に意思決定を行うSDMのような意思決定の形が, 作業療法には理想的である」と述べている。今回OTRは, CLと病棟スタッフ間で生じた問題に対して, チームマネジメントを意識した関わりを行った。CL・各職種の双方にSDMを用いた介入を実施した事で, 各職種がCLの想いをくみ取った対応に変化し, 生活範囲が広がった事でCLの生活変化に繋がったと考える。